

# 志賀の曙光

## 山尾幸久先生追悼文集

山尾幸久先生から学んだ史料批判の  
姿勢

福持昌之

私の山尾先生との出会いは、一回生の四月である。立命館大学に入学した一九九〇年当時、日本史専攻では演習形式の専門科目として一回生は研究入門、二回生は基礎演習、三・四回生はゼミが必修だった。研究入門と基礎演習は、学籍番号を奇数と偶数で分けた約五〇名ずつのクラスで開講され、前・後期で教員が入れ替わる。つまり、ゼミに分かれるまでの二年間で、四つの時代別の指導が受けられる仕組みだった。私は一回生の前期が山尾先生で、「神功皇后伝説の検証」をテーマにグループ発表に取り組んだ。

立命の日本史が第一志望だったものの、私の志望動機は薄っぺらだった。数学が苦手なため私立文系。自

宅から通えて、日本史に定評のある大学。そう言つて母校・平城高校の日本史の教諭に相談した結果である。大学受験の先にある学究の世界についての予備知識はなかった。立命で、先生方や諸先輩方を通じて歴史研究の奥深さと幅の広さに目が覚め、演習科目を通じて志を同じくする仲間との切磋琢磨の重要さに気付くことができた。そして、山尾先生をはじめ諸先生方からは、孤独に耐えて戦う姿勢を学んだ。チームプレイが功を奏する場合もあるが、歴史学研究は基本的に個人種目であり、憲法で保障された「学問の自由」を個人で実践できる格好の学問である。私の自主・自立の精神は、立命で育まれた。

研究入門は、衣笠キャンパスの南端に建つ清心館の地下一階の教室で開講された。ドライエリアや中庭があるものの、常にひんやりした教室。先輩から山尾先生は怖いと聞いており、発表者を見つめる先生の表情が気になってしかたがなかった。くだらない発表の時

はレジュメに火をつけて焼くという、噂の場面に出くわすこともなく、半期分の単位も無事に取得できた。しかし、山尾先生に怒られたくない一心で、足繁く図書館に通い、成果を持ち寄つて仲間と議論した日々は今も忘れない。二回生になって、大講義室でうけた「魏志倭人伝」を再検証するという講義は、私の集中力が不足していて理解には至らなかった。ただ、毎回配られた手書きの縦書きレジュメは衝撃的で、論考が成立していく過程と、そこに込められた山尾先生の膨大な熱量を垣間見せていただいた。

ゼミは一・二回生で縁がなかった中世史を選んだ。古代史よりも史料が豊富で面白そうだから、一回生で参加して興味を持った藝能史研究会に川嶋教授が関わっていたから、などいくつか理由があったが、今思うとあれこれ食い散らかしたいという助平心のせいだったのかもしれない。卒論で寺院をテーマにしたことから法会や年中行事に触れ、京都教育大学大学院では民

俗芸能や祭祀行事の調査を始め、博士後期課程で立命の大先輩、帝塚山大学の岩井宏實先生の下で民俗学に転向した。そんな私が、山尾先生の教えを再認識したのは、三〇代のはじめ、滋賀県の愛知川町史編さん室に勤務していた時のことである。

ある日、近現代編の執筆委員である立命の先輩が、「聞き取り調査だけでは、史料として使えない。複数の史料と比較して検討しないと史実かどうか決めかねる。ただ聞いたことを筆耕しているだけでは役に立たない」とおっしゃった。前半はいわゆる史料批判の教科書的な発言であるが、後半は民俗学を否定されたような気がした。そこで、必ずしも複数の史料に恵まれているとはいえない古代史において、果敢に史料批判をされてきた山尾先生の学問を思い出したのである。

史料が少なく比較検討が難しい場合でも、史料批判の方法はある。私なりの理解では、『日本書紀』にしか書かれておらず、他に参照すべき史料がなくても、そ

の記述の前後の記述と比較することで、矛盾や重複を見出し、論理構成を分析する。そうして妥当な推論を仮定し、それを検証していくことで史料批判は可能ということであろう。聞き取り調査においては、予め質問項目を細かく設定し、要点を絞つて臨むべきだという人がいる。私も事前準備の必要性は認めるが、私は効率を重視するよりも、少し時間をかけて聞くことにしている。話者の個人情報など基礎的な情報も、一問一答で聞くのではなく、話の流れで自然に聞く。すると話者の知識や経験の範囲も自ずとわかり、さらには話し癖や会話のリズムもつかめる。するとこちらも対話の緩急が自在となり、時間対効果もあがる。誰しも勢いで話を誇張してしまったり、いい加減な数値を伝えてしまったりすることがある。それらの違和感を察知し、対話の中で確認する。また、言葉の詰まり、苦しい表情など、文字には現れない情報も重要であり、それらを総合して個別事象の信憑性の判断材料となる。

媒体に関わらず、きちんと史料とコミュニケーションをとることが重要であり、史料批判の可能性を諦めてはいけない。これは山尾先生から学んだ、民俗学にも通用する教えである。

(一九九〇年入学、ふくもち まさゆき)

# 志賀の曙光―山尾幸久先生追悼文集―

二〇二二年十一月四日 発行

編集・発行 山尾幸久先生追悼文集刊行世話人会

〒七〇八―〇三〇三 岡山県吉田郡鏡野町大町四―三 湊哲夫方

印刷 (株) 北斗プリント社

〒六〇六―八五四〇 京都市左京区下鴨高木町三十八―二